

先生と学生たちは、いまこんなことを考えている

ケンチク学ビバ

題字・イラスト/阿部伸二(カレラ)

Vol. 26

宇都宮大学
地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科

准教授 安森亮雄

取材・文/秋川ゆか
写真提供/安森研究室(特記をのぞく)

安森亮雄 Akio Yasumori
1996年東京工業大学工学部建築学科卒業。98年同大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。99年オランダ・ベルラーヘ・インスティテュート留学。2002年東京工業大学大学院建築学専攻博士課程単位修得退学。同大学院では坂本一成研究室で研究と設計を行う。09年から現職。博士(工学)。

宇都宮大学 安森亮雄研究室
(陽東キャンパス)
栃木県宇都宮市陽東7-1-2 陽東8号館
<http://yasumori-lab.jp>

地域を学び、デザインする

宇都宮大学は、2キャンパス5学部を擁する国立大学だ。陽東キャンパスにある地域デザイン科学部は、地域の資源や特性を生かしながら課題を解決し、新しい地域デザインに取り組み文理融合の学びの場として2016年に誕生した新学部。40年の伝統を持つ工学部建設学科の建築コースを移行したのが建築都市デザイン学科である。ほか、建設工学コースは社会基盤デザイン学科となり、地域自治や観光、福祉などを学ぶコミュニティデザイン学科も新設された。また同時に学部附属組織として、地域との連携窓口になる地域デザインセンターも開設している。

それによってどう変わったのかと尋ねると「できることがひろがりました」と、建築デザインや建築設計製図を教える安森亮雄先生。

「もともと建築とはそれ単体ではなく、その土地の特性や文化を知ったうえで考えるべきもの。そこに大学教育が踏み込んできた。変わったというよりもむしろ、現場に近づいてきたんです」

だから学生はどんだん地域に出て学ぶ。まちを歩いて観察する授業は1年後期からはじまるという。なぜそれをそこに建てるのか、あるいは既存の建築をそのまま残すか、リノベーション

するべきか。また、誰が素材を調達し、誰が建設を担い、誰が使うのか。

「人も材料もモノも地域のネットワークの網目を成していて、その中に建築がある。しかし一方で建築にはデザインとしての密度も必要。その両面をしっかりと学んでほしいです」

風景と人々の間にある建築を

4年生から所属する研究室ではさまざまなプロジェクトに取り組んでいる。たとえば地域の特徴的な素材である大谷石。農村地域や市街地の大谷石建造物を長年調査してきた。東日本大震災でガレキとなった大谷石をキャンパス内に再利用したり、市内でシンポジウムを開催したり。今は国内外の「石のまち」研究にも触手を伸ばしている。

市内を流れる釜川周辺のまちおこしは6年ほど前から。季節ごとのイベントでは、仮設什器をデザインしまちの居場所をつくり出す。そこでの制作経験は、企業のオフィス改修にも生かされた。地域資源への着目としては、河川沿いに発達した染色デザインへのアプローチも行った。今は栃木県内のやきものである益子焼の工房調査も進めている。また、昨年スタートしたキャンパス近くの空き家改修も、学びと地域貢献の双方から期待される試みだ。

学科の校舎の改修設計も、安森先生



研究室のみんなで、学科棟である陽東8号館ロビーの大谷石の壁の前で。学部4年生から参加する研究室に在籍するのは現在13人。

を中心に研究室で手がけた。配管・配線などを現しにし、随所に大谷石も使っている。新築の学部棟には院生がデザインした家具を並べたコーナーもある。ほど近い峰キャンパスでも「UUプラザ」を改修。ここでも大谷石のベッチが印象的だ。「校舎の教材化をもうくろみました」と先生。確かに。毎日、目にする意義は大きいに違いない。

それにしても、まちおこしイベントから家具デザイン、空き家改修、地域産業振興……、かなりの幅広さだ。「風景と居場所、都市スケールと身体スケールの揺れ幅の中にこそ、建築デザインがあるんです」と安森先生は言う。

研究室には、まちづくりや地方再生に貢献したいと話す学生がとても多い。卒業後の彼らの活躍が楽しみだ。

地元の建材「大谷石」の研究

宇都宮で産出する大谷石は、軽くて加工しやすい建材として土木材、建材として地元でも広く使われてきた。農村部4地区と大谷町、宇都宮市街地を対象に、構法・用途による類型やまちなみ形成を8年前から調査。大谷石建造物の保存や活用のあり方にも取り組む。また昨年はNPO大谷石研究会主催で宇都宮市や宇都宮美術館が後援し、「石の街うつつのみや」シンポジウムを開催。来年には国内各地と共同した「石の街サミット」を計画している。

階層	積石造(木造)		積石造			鉄筋コンクリート(RC)臥梁・柱梁・積石
	全部積石	一部積石	基礎積石・木骨積石	組積	組積	
1階			平屋 基礎石納屋 基礎石母屋	平屋積石納屋 平屋積石蔵 平屋積石小屋		
2階	2階建て積石蔵 2階建て積石住宅	2階建て一部積石蔵 2階建て一部積石住宅	2階建て木骨積石蔵	[複合型] 2階建て積石蔵・納屋 2階建て積石蔵・納屋 2階建て積石蔵・納屋 2階建て積石蔵・納屋 2階建て積石蔵・納屋 2階建て積石蔵・納屋	2階建てRC積石蔵 2階建てRC積石住宅	2階建てRC積石住宅 2階建てRC積石蔵住宅・店舗

積石や張石など、大谷石を使った建造物を調査してタイポロジーを分類した表。

上/宇都宮市農村部での集落調査。これまで西根・芦沼・上田原・上田の4地区を順に調べてきた。吸湿性に富んだ大谷石は蔵に使われることが多い。下右/大谷石採掘場を訪ねて、その現況を知ること調査の一環だ。下左/陽東キャンパス内の学料棟8号館のエントランスには、大谷石のさまざまな仕上げを体感できる壁を設けた。



学生の声

小林基澄さん(博士1年)

学部4年生のときに農村部の宇都宮北部上田地区、修士2年からは都市部である宇都宮中心市街地の大谷石建物を調査してきました。都市部の石蔵はカフェなどにしやすいので、そうした活用方法について研究を進めています。大谷石ひとすじに4年目。将来は、こうした地域の特色的な素材を生かしたまちづくりに関わっていければと思っています。



コミュニティスペース「旧とみくら商店」の改修

学生の声

塚本琢也さん
(修士2年)

地域の工務店とともにとみくら商店改修を担当しました。桐箆箆を解体して小上がりにしたり、大きなアイロン台をどう生かすか皆で考えたり。ここを使う方々の思いに応えながら、ライブ感を持って現場で考え、変えていくというのは貴重な体験。とても楽しかったですね。故郷の宿場町に新しい魅力を吹き込むのが私の夢。この経験はきっと生かせそうです。

上/改修前の「とみくら商店」。店舗住宅当時の姿のまま、地域の集まりなどに使われていた。下右/学生による自治会の人々への説明会。内部改修の模型や、数種のファサードプランも用意した。下左/昨年未だに終了した第一期改修。壁や押入れ、天井板を取り払った屋内は、地域に開かれたリビングになった。今年にはファサード改修に取り組む。



煙草屋やクリーニング店を営んでいた宇都宮市東峰西地区のとみくら商店は、閉店後そのまま地域サロンに使われていた。安森先生が会長を務める宇都宮空き家会議と地域自治会、安森研究室、コミュニティデザイン学科との協働でリノベーション。空き家再生により「みんなのリビング」を創造するモデルをめざした。今後はこの実績を他の空き家に展開。

オープンカフェの家具からオフィスまで

NPO宇都宮まちづくり推進機構と協働し、宇都宮中心市街地の「オリオン通り商店街」にパブリックスペースとしてのオープンカフェを展開した。栃木産材でテーブルや椅子、花台、告知ボードなどに汎用できる家具をデザイン。学生たちの手によるこのファニチャーシリーズは、キャンパス内や、NHK宇都宮放送局のオフィス改修にも生かされた。



下右/宇都宮市内のアーケード「オリオン通り商店街」でのオープンカフェの様子。まちの活性化をめざし、店舗の前にデザインした家具を置くプロジェクト。下中/シンプルな構造で多様に使える家具をみんなで塗装。下左/デザインした家具は、地域デザイン科学部棟のロビーにも。上/NHK宇都宮放送局のオフィス改修を依頼され、3月末に竣工した。写真:鈴木淳平

学生の声

岩淵達朗さん(修士2年)

オリオン通りの家具設計を経て、NHKオフィスの改修の設計・監理を担当しています。電気や電話の配線、家具、内装……と多くの方にかかわっていただく現場。すべての要素を把握し、的確にコントロールすることで素晴らしい空間が完成していく過程を経験しています。今の時代の Commonspace についての修士研究につなげていきます。



桜まつりの川床をプロデュース

宇都宮市街の中心部の釜川沿いは、しだれ桜の並木が美しい。その流れの上に川床を設営して、自由に飲食を楽しんでもらうのが、2013年から宇都宮まちづくり推進機構とはじめた「川床桜まつり」だ。今では地域の春のイベントとして定着し、多くの人々が楽しむ。



学生の声

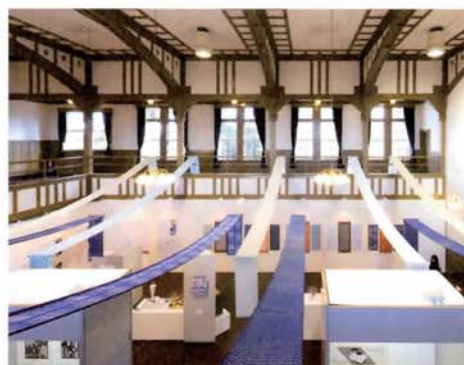
松本大知さん
(修士1年)

大学院に進んで、川床桜まつりの担当を引き継ぎました。宇都宮まちづくり推進機構と連絡を取り合いながら、ポンボリや看板の制作、設営準備などを行っています。今年から釜川のそばに住みはじめたので、日々まちの様子を見て、空地を利用して中心市街地を盛り上げるイベントなど提案できればと考えています。



釜川の川床桜まつりのようす。親水空間の川面に床やポンボリを設置して、この期間だけの特別なパブリックスペースをつくり出す。近くのオリオン通りと回遊する仕掛けも研究中だ。

「宮の注染」をきっかけに 全国の染工場調査へ



「注染」という技法に代表される宇都宮の染色。市民公募で選ばれたデザインによる反物は、峰キャンパスの峰ヶ丘講堂(大正13年建造)で展示した。写真:鈴木淳平

宇都宮美術館の館外プロジェクト「地域産業とデザイン〜宮の注染を拓く」では都市調査や会場デザインを担当。染工場と組み、ワークショップ形式で学生や地域の人々が新しいパターンを開拓した。工場やまちを調査するうちにその特徴を知り、その後全国の染工場や地域産業の調査につながっている。